



Title	初対面会話におけるポライトネスに関する談話研究
Author(s)	三牧, 陽子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59886">https://hdl.handle.net/11094/59886</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	三 牧 陽 子
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 5 7 1 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 11 月 21 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	初対面会話におけるポライトネスに関する談話研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 沖 田 知子 (副査) 教 授 金 崎 春幸 准教授 山下 仁

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、Brown & Levinson（1987）をはじめとしたポライトネス理論研究の展開と課題をふまえ、ポライトネス研究の範囲を談話全体に拡大することの重要性を主張し、談話レベルで初めて明らかになる日本語のポライトネスのダイナミックな諸相を実証的に論じたものである。

コミュニケーションに際して行う多様な配慮が際立ち、特に意識されると考えられるのは、背景知識や会話スタイル等を相互に共有していない初対面状態での会話である。そこで、分析対象を日本語母語話者二者間の初対面会話に求め、初対面会話におけるポライトネスがもっとも明瞭に観察可能になるよう、同性間において、会話相手に関する背景情報をまったく持たずに開始された、特定の役割を持たない自由会話場面を設定し、録画、文字化したデータを分析に用いた。ポライトネスの諸相を具体的に捉えるために、談話レベルの概念である「スピーチレベル管理」、および、「話題管理」等に焦点を当てた談話分析を切り口に、分析、考察した。

まず、第 1 部として、本研究の対象である初対面会話研究およびポライトネス研究を概観し、その研究の展開や課題を述べ、本研究の位置づけを示した。第 1 章では、初対面会話の特質を、相手に関する活用可能な背景知識の欠如から、自己開示に関する相互行為が必要となること、および、コミュニケーションを円滑に進行させるために心的距離の接近と同時に、疎である相手に対する配慮から一定の距離保持という、相反する要請が明白な場面であることの 2 点を挙げた。さらに、初対面会話研究の種々のアプローチを検討し、初対面会話データに実際に表示された相互行為にみるポライトネスを、相互行為の社会言語学や会話分析等の諸概念を用いて分析するという立場を明らかにした。

続く第 2 章で、ポライトネス研究の展開を概観し、課題を検討した。現在、ポライトネス理論研究では「言説的アプローチ」と「新・合理主義的アプローチ」の対立構図が見られる中、主張される課題自体には、インポライトネス、受け手の観点、有標／無標の重視・導入等、共通点が多いことが指摘できる。それらの課題の中でも、談話レベルでポライトネスを捉えることの重要性は総じて主張されてはいるものの、談話全体を対象にした詳細な実証研究がないことを問題視し、本研究では談話レベルにおいて、聞き手の観点も重視した参加者間の相互行為をマイクロ、マクロに捉えたダイナミックかつ多彩なポライトネスのあり方を実証的に示すことを目的とした。また、ポライトネスのメカニズムを総合的に解明するための理論構築には、用語や概念整理をはじめ、課題相互の関連を含めた全体像が包括的に示されるに至っていないことが大きな問題であることから、概念を総合的に整理した枠組みを提示した。

第 3 章では方法論を示した。分析に用いた主要なデータは、計 38 ペアの日本語を母語とする同性大学生・大学院生 2 者間の 15 分間の対面自由会話データである。社会的な立場に差を設けるため、同学年ペアと異学年ペアの両方に参加するよう組み合わせ、会話データは忠実に文字化して分析データとした。会話収集直後に感想等をインタビューで尋ねる意識調査も実施し、分析にあたって参照した。

以上の概念整理と課題設定をふまえ、第 2 部と第 3 部において分析、考察を行った。第 2 部では、言語的な形式である日本語のスピーチレベルは、相手との関係や場面に応じて設定されるとともに、談話の進行に伴ってシフトすることも多く、談話レベルにおけるポライトネスのダイナミックな様相を捉えることが可能となることに注目した。ま

ず、第4章で、スピーチレベルに関する主要な概念や先行研究を概観した上で、スピーチレベルに関する筆者の定義を整理して述べ、スピーチレベルに関する理論的な枠組みの構築を図った。

スピーチレベル管理のうち、文末のスピーチレベルに注目した第5章では、当該談話の基本的スピーチレベルの設定のあり方と、基本的スピーチレベルの設定によって示されるポライトネスの諸相を分析した。その結果、同等の相手との初対面会話にあたっては、選択すべき基本的スピーチレベル（丁寧体／普通体）という形ではなく、社会的に同等の相手とは同一の基本的スピーチレベルを設定すべきだということが社会的規範として強く働き、そのために参加者は相互行為の中でスピーチレベルをその分布に至るまで調整し合うことを見出した。その理由は、非対称的な基本的スピーチレベル設定による上下関係を示唆するFTAを回避し、同一の基本的スピーチレベル設定によって同一基盤に立つ仲間であることを示すポジティブポライトネスとなることを了解し合っているからであると考えられる。基本的スピーチレベルは、上下関係の表示に見るように、社会的規範としての言語使用の側面に規定される部分も大きい。同時に、それぞれ初対面の疎の関係の表示、上位的立場の表示、仲間意識の強調等の個人のストラテジーとしても機能する。また、その後の相互行為の中でも、種々のスピーチレベル管理がストラテジーとして用いられることも示した。

さらに、スピーチレベルという言語手段を利用した巧妙なポジティブポライトネス・ストラテジーの側面に焦点を当てたのが第6章である。丁寧体基調話者の会話データに観察された、① 中途終了文、および、② 文中に普通形の節を多用した文構成（例：「～て、～て、～て、終了／中途終了」）は、聞き手目当てで本来丁寧体を使用すべきスピーチレベル表示箇所において、丁寧体の繰り返し使用を回避するためのストラテジーとなる。また、③ 独話的発話、④ 普通体でなされた発話や心情／思考の直接引用、⑤ 発話時の自己の心情や思考の直接的な表出は、いずれも聞き手目当てではなく話し手の領域に属する発話を使用することによって、普通体使用が可能になるというストラテジーとなる。さらに、普通体および俗語や方言などくだけた語彙を持ち込むことも可能になるため、丁寧体基調話者、ことに社会的下位話者にとっては、丁寧体のみの堅苦しさを和らげ、心的距離を接近させる機能を有する巧妙なストラテジーであると論じ、スピーチレベル管理がポライトネス表示の有用な手段、指標となることを実証的に示した。

第3部においては、談話の分析を通して、談話全体におけるポライトネスのダイナミックな様相を分析した。第7章では話題選択の観点から論じた。共通基盤がなく開始される初対面会話における話題選択に関して、① 母語話者が準拠する「話題選択スキーマ」が、話題カテゴリーとしての大きな枠組みとして存在し、具体的な話題項目は、各グループ（大学生、社会人等）固有の項目が相当するという形で形成されていること、② 話題選択は基本的に相互のフェイスへのFTAの可能性を持ったため、ポライトネスへの配慮が欠かせないこと、③ 積み上げられたポジティブポライトネスによって、談話の進行とともに話題転換がスムーズに進行し得ること、をそれぞれ具体的に論じた。

第8章では、会話の主導権との関連を見るために、社会的に上下関係が設定された異学年ペアに分析対象を限定し、初対面会話の特徴的な行為である自己開示の様相に関して分析、考察した。まず、自己開示の対称性に関しては、約半数の情報に関して自己開示を対称的に行っているという実態が明らかになった。その上で、非対称的な自己開示を示した話題に限定して分析した結果、話題管理に関する主導権のあり方には、男性群においては上位者の方が話題管理し、なおかつ自己に関して多く話し、女性群では上位者の方が下位者に多く話す機会を与えるという形で話題管理を行うという、ジェンダーによる特徴的な傾向が見られた。また、自己開示要求された場合の応答は、ほとんどが協調的な自己開示であった。自己開示要求を受けた側が、自己のネガティブフェイスへのFTAの側面よりも自己開示によるポジティブポライトネスの側面を重視し、非開示によるFTAを回避する姿勢を共有しているからだと考えられる。

第9章では、談話全体を視野に入れることによって初めて可能になるポライトネスの様相を解明するという本研究の目的をもっとも端的に示すことができるのは、詳細な談話分析であることから、初対面会話において心的距離を接近させ、円滑に会話を進行させるためのポジティブポライトネスの表出という点で特徴的な展開を見せた会話例を3例取り上げ、談話全体を視野に入れた分析であるからこそ明らかに、相互行為のダイナミックな様相を分析した。同意や共感の強調的な積み重ねや、一定のフットイングに基づく役割（嘆きと共感、ぼけとつつこみ）の獲得とパターン化等が、会話ペアごとに仲間意識の構築の実現手段となったことを明らかにした。

談話全体におけるFTAのバランスを論じたのが第10章である。一方の参加者が質量ともに過度なFTAを遂行した会話例を分析した結果、談話全体として話者間のFTA量のアンバランスを是正するダイナミックな相互行為が存在することを指摘し、「FTAバランス探求行動」と称した。その具体的な方法として、次の3点を挙げた。① 過度のFTAを犯したと認識すると相手からのFTAを誘導し、フェイスを侵害された側も相手からの誘導に応じてFTAを遂行する、② 過度のFTAを犯した側が、その後自らに対してFTAを遂行する、③ 相手から多めにFTAを受けたと認識すると自発的に相手に対してFTAを遂行する。これらは従来の「FTA軽減型」のストラテジーとは大きく異なる、新種の「FTA追加型」の行動と位置づけられる。

以上の分析結果から、初対面会話において日本語母語話者が示す、多様かつ非常に巧妙なポライトネスの様相が明

らかになった。共通して浮かび上がってきたのは、スピーチレベルの設定、話題導入や自己開示、すでに犯してしまったFTAの補償や追加等、多岐にわたって、会話参加者が談話全体をモニターし、アンバランスを認めると是正し、談話全体としてのバランスを志向することである。このような種々のバランス探求行動が実現するのは、過度のアンバランスは双方のポジティブフェイスおよびネガティブフェイスにとって望ましくないとの認識が話者間で共有されていることに他ならない。これらは、従来のポライトネス理論に新たな観点を付加するとともに、本論文の結果の他の種類の会話（初対面以外の会話、他言語文化、他世代等）における検証という新たな課題を提起することでもある。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、初対面の会話を例に、談話全体におけるスピーチレベル管理と話題管理に焦点をあて、ダイナミックに展開される日本語のポライトネスの諸相を実証的に分析、考察したものである。談話レベルにおけるポライトネス研究の必要性は指摘されているものの、端緒を開き本格的にとりくんだのが本研究であり、この研究分野の今後の動向に与える影響はきわめて大きい。

本論文の特徴は、談話分析における言語表現上の差異に注目するのみならず、意味論上のレベルに踏み込んで、話題という言語表現の内容を分析している点、また、ポライトネスという現象が顕在化する対象として、談話の細部に関するミクロのレベルのみならず、談話全体を分析の対象とするマクロな情報交換を視野に入れて分析している点にある。とりわけ、スピーチレベルの設定、話題導入や自己開示、FTAの補償や追加などにおいて、話し手と聞き手の双方が談話全体をモニターしつつ、アンバランスを認めれば是正するというバランス探求行動をとっていることを実証している。このバランス志向は、談話を談話として、全体として分析してみてもはじめて明らかになる点であり、従来の談話分析には欠けていたきわめて重要な考察結果である。またBrown and Levinson (1987)を始めとする先行研究とは異なり、聞き手の観点も重視した双方向的な相互行為を通してポライトネスを捉えた慧眼は、特筆に値する。

これまでの日本語のポライトネス研究が、とすれば標準語を前提として、丁寧体と普通体の分析に終始するなかで、本論文では、大阪という地域性や、それに伴う方言、もしくは、ぼけとつつこみという特徴を考察の対象としている。さらに、場面や仲間意識、あるいはバランス探求行動などの行動のレベルに関与する現象に光を当て、ダイナミックに相互関係を実証した点は、独創的である。この点においても、日本語のポライトネス研究にとって新たな手法を提示しているといえよう。

従来のポライトネス研究の問題点と論点を明快に捌き、それを補完かつ進展させる形で新たな視点を導入して、談話レベルにおける話題やFTAなどのバランス探求行動の様相をダイナミックにかつ実証的に抽出したことは、本論文がポライトネス研究における確たる方向性と手法を示した成果として、その貢献はきわめて大きい。なお、談話全体におけるポライトネスのバランス探究については、筆者自ら今後の課題と位置づけてはいるが、さらなるポライトネス研究の方向性を示唆するものとして意義深く、その成果が待たれる。

以上のことから、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。